

## 故郷を探し求めて

牧師 山本 護

「この人たちは皆、信仰を抱いて死んだ。約束されたものを手に入れなかったが、はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表した。このように言う人たちは、自分が故郷を探し求めていることを明らかに表している(ヘブライ 11:13~14)」。

この冬の初雪は早く、昨秋の11月に降りました。翌日は晴れて木枯らしが吹き、コナラやリョウブが葉を落として、集会所脇の十字の踏み石を飾った。この光景にどういうわけか郷愁を感じて一句。「初雪や踏まれ十字のありどころ」。写真がなくて拙句だけだったら深読みされるキリスト者がいるかもしれません。なにしろ十字架には、踏みにじられ、足の下で私たちを支えてくれている、というイメージがあるからです。

冬の季語と「ありどころ」という言葉を結び合わせるのに、うっすらと郷愁が感じられる手本がありました。「木がらしや東京の日のありどころ／芥川龍之介(1892~1927)」。そしてもう一句、芥川が手本にしたであろう「凧(いかのぼり)きのふの空のありどころ／与謝蕪村(1716~83)」。凧あげは今や正月の風物ではありませんが、子供の私はこの時季、東京の冬ざれた原っぱで自作の凧を高くあげ、蒼穹の彼方に無意識の祈りを送っていたように思います。ちなみに魚釣りなども異次元と交信する遊びで、浮きの奇妙な動きが水中冥界のメッセージを伝えているように感じていました。



教会では、やがて到来する神の国が、希望とか、喜びとか、勝利とか、明るくエネルギーに表現されます。しかし私が思い描く神の国は、旗が門柱に立てかけられた元旦の朝のようにひんやりした雰囲気。ただ冷静に考えれば、神の国は人間の想像力や理性の範囲に納まるはずなく、いずれも正解ではありえない。とはいえ素朴な思いからこれを想像せずにはいられない。ヘブライ書は神の国を「故郷」と言い換えています。

「故郷を探し求めている(ヘブライ 11:14)」、「更にまさった故郷、天の故郷(11:16)」。初期の信徒たちが熱望し(11:16)、待ち望んでいた神の国は「patris(故郷=祖国)」。つまり「pater(父)」に由来する先祖伝来の次元。ということは、神の国の到来とは「未来へ帰郷する」イメージでしょうか。だとすれば、私が勝手に思い描いている郷愁めいた神の国も、あながち外れていないかもしれません。

「凧きのふの空のありどころ」、蕪村はキリスト教との接点は皆無。「木がらしや東京の日のありどころ」、芥川は聖書を熟読していました。人間誰も、自分の根源たる「故郷を探し求めている(11:14)」ののかもしれません。Ω